写

答　　申　　書

平成３０年１２月２６日

奈良県教育委員会
教育長　吉　田　育　弘　殿

奈良県文化財保護審議会
会長　菅　谷　文　則

平成３０年１０月４日付けで諮問を受けた下記記載の県指定候補及び追加指定候補の案件について、各部会による調査等を経て、平成３０年１２月２６日開催の本審議会において慎重に審議した結果、奈良県指定文化財として指定し保護することが適当と認められる。

記

奈良県指定文化財としての指定　７件（別紙記載のとおり）
奈良県指定文化財の追加指定　　１件（別紙記載のとおり）

平成３０年度　奈良県指定文化財答申一覧

【指定諮問物件】

種　別	番号	名　　称 （時　　代）	員数	所　在　地	所有者 （保持団体）	分　野	特　　徴 （候補抽出元）
有形 文化財	1	木造阿弥陀如来及両脇侍像（鎌倉時代）	３躯	田原本町大字蔵堂354	浄福寺	彫刻	浄福寺の本尊で、来迎の場面を表す阿弥陀三尊像。穏やかな顔立ちや浅い衣文には平安時代末期の定朝様の継承が見られるが、胸が張り腰の引き締まった体躯には鎌倉時代の特徴を示す。来迎場面の彫像化は県内では珍しく、貴重である。（田原本町悉皆調査で見出された。文化庁と共同調査済み）
	2	絹本著色八高僧連坐像 （南北朝時代）	１幅	吉野郡下市町大字善城27	瀧上寺	絵画	秋野川畔の浄土真宗本願寺派、瀧上寺に伝わる高僧連坐像。中央上部の善導に始まり下端の釈聖空までの法脈を図示している。室町時代以降に多く作成される高僧連坐像の先蹤をなすもので、真宗絵画史上大きな意義を有する作品である。
	3	黒漆舎利厨子 （鎌倉時代～南北朝時代）	１基	大和郡山市矢田町3506	金剛山寺	工芸品	矢田地蔵で著名な金剛山寺に伝わる小型の舎利厨子。内部奥壁には半出状の舎利容器を嵌装し、扉には不動明王と愛染明王を描く。密教の観相に用いられたと考えられ鎌倉時代以降の南都における舎利信仰の隆盛を示す遺品として価値が高い。
	4	木奥家大工関係資料 （江戸時代～明治時代）	297点	奈良市芝新屋町17	木奥良彦	歴史資料	江戸時代に春日座十六人大工の一員として春日大社等の造営に携わった木奥家に伝わる資料群。大工道具の種類の豊富さ、点数の多さは国内でも有数である。多彩な道具類に加えて図面類、古文書、古記録類が一括して伝来しており、建築史上価値が高い。（『木奥家所蔵大工道具調査報告書』）
	5	尼寺廃寺塔跡心礎出土品 （飛鳥時代）	20点	香芝市藤山１丁目17番17号　香芝市二上山博物館	香芝市教育委員会	考古資料	尼寺廃寺は７世紀後半創建の古代寺院であり、国指定史跡。塔跡心礎から出土した耳環・玉類・刀子は古墳の副葬品と共通するもので、飛鳥寺や中宮寺などの塔心礎出土品に類例がある。古墳の副葬品と共通する装身具などが心礎に納められた例として重要であり、さらに発掘調査によって出土状態がわかる事例としても貴重な考古資料である。（香芝市推薦）
無形民俗 文化財	6	大保の宮座行事		奈良市大保町	大保八坂神社宮座行事保存会	無形民俗文化財	楽器を手にしたお渡り衆による渡御行列や三角跳び、横跳びは田楽芸等を模倣した東山中に共通した芸能の代表的なものである。また二十一の森神を呼び出す儀礼は神おろしの神楽との関連も指摘されている。田楽芸を伴った東山中における祭祀形態を典型的に伝承する事例として重要である。（『奈良市民俗芸能調査報告書』、『奈良県の民俗芸能』）
史跡	7	西安寺跡 （飛鳥時代）		王寺町舟戸2丁目4189番	舟戸神社	史跡	７世紀後半～８世紀前半に大和川左岸に建立された寺院である。発掘調査の結果、金堂の位置が従来想定されていた位置と異なることが明らかになり、四天王寺（山田寺）式伽藍配置であったものと考えられる。塔基壇は一辺13.35mで法隆寺西院伽藍五重塔と同規模である。大和の玄関口に集中して建立された古代寺院の役割を考える上で重要な遺跡である。（王寺町推薦）

【追加指定諮問物件】

種　別	番号	名　　称	員数	所　在　地	所有者 （保持団体）	分　野	追加指定理由
史跡	1	越塚古墳 （古墳時代）	１基	桜井市粟原2896、2904、2905、2906、2908、2909、2911番	内藤よし子	史跡	奈良盆地でも有数の巨石古墳で、６世紀後葉の築造と推定される。従前の指定地番である粟原2896は古墳の東側にあたり、保護すべき墳丘の主要部を含んでいない。史跡としての保護を確実なものとするため、石室を含む墳丘と、その築造に関わる周辺部を追加指定する。

1　木造阿弥陀如来及両脇侍像　３躯　［有形文化財（彫刻）］

［所在地］　磯城郡田原本町大字蔵堂354

［所有者］　浄福寺

［法　量］　像高（阿弥陀）87.7cm（観音）61.8cm（勢至）62.2cm

［時　代］　鎌倉時代

［概　要］

浄福寺の本尊として伝来した阿弥陀三尊像。ヒノキ材製で、中尊は寄木造、両脇侍は割矧造になる。阿弥陀は両手の第１・２指を捻じて来迎印を結び、観音は片膝を立て両手で蓮台を捧げ、勢至は跪座して合掌する。この姿は往生者の臨終に際して阿弥陀三尊が迎えに来る場面をあらわしたもので、両脇侍の天衣や腰布、裙裾が後方になびきながら翻る様子はそのスピード感と臨場感をあらわしている。知恩院の阿弥陀二十五菩薩来迎図（国宝）にみられるような来迎の速さを希求する当時の信仰に応えた表現と考えられる。

穏やかな顔立ちや浅くなだらかな衣文の表現には平安時代末期の定朝様の継承がうかがえるが、胸が張り腰の引き締まった体躯や、内刳りの厚みが均一で条帛を別材でつくる構造などは次代の特徴を示す。鎌倉時代初期（13世紀初）の京都仏師による製作と推定される廬山寺の阿弥陀三尊像（重文）には形式的に共通する点が多く、本三尊像もその頃の作とみられる。来迎場面を彫像化した例は県内では珍しく、鎌倉時代前期における彫刻史の展開を考える上でも重要な作品である。

２　絹本著色八高僧連坐像　１幅　［有形文化財（絵画）］

［所在地］　吉野郡下市町大字善城27

［所有者］　瀧上寺

［法　量］　縦125.0cm（４尺１寸２分）　横54.7cm（１尺８寸）

［時　代］　南北朝時代

［概　要］

秋野川畔の浄土真宗本願寺派瀧上寺に伝わる高僧連坐像である。最上部中央の善導和尚にはじまり、源空聖人（法然）、親鸞上人、性信上人、釈願性、釈愚咄を経て、瀧上寺開基の釈聖空に至る８人の法脈をあらわす。

各像の顔容は個性豊かに描き出され、高い写実性が認められる。法然像は前屈み右斜めのいわゆる「足曳御影」（二尊院所蔵、重文）の姿勢がとられ、親鸞像も西本願寺所蔵の「鏡御影」（国宝）に通じる容貌を示しており、真宗画像に特徴的な像容がよく顕れている。

本図については、『存覚上人袖日記』に記載がある、応安２年（1369）に修復が施された「往古真影」に当たるものと見られる。『袖日記』によると、聖空は延文元年（1356）に没しており、本図の作成年代は聖空が没して間もなくの南北朝時代半ば頃と考えられる。

本図は室町時代以降に多く作製された高僧連坐像の先蹤をなすものであり、その精彩に富む顔容の筆致は鎌倉時代の作風をも思わせ、数ある連坐像の中でも優れた作品と位置づけることができる。高僧連坐像の最古級の作例として、真宗絵画史上に大きな意義を有する作品である。

３　黒漆舎利厨子（こくしつしゃりずし）　１基　［有形文化財（工芸品）］

［所在地］　大和郡山市矢田町3506

［所有者］　金剛山寺（こんごうせんじ）

［法　量］　総高32.0cm

［時　代］　鎌倉時代～南北朝時代

［概　要］

矢田地蔵で著名な金剛山寺に伝わる小型の舎利厨子。木製黒漆塗の宮殿形（くうでんがた）厨子で、扉を開けた正面奥壁に半出状の舎利容器を嵌装（がんそう）する。舎利容器は、蓮華座に立てた独鈷杵（とっこしょ）の上に蓮華座をのせ、その上に月輪（がちりん）内に現れた蓮台火焔宝珠（れんだいかえんほうじゅ）をのせる。宝珠部分は一段くぼませて金銅板で３区に分けて舎利を納め、水晶製窓で蓋をしている。こうした形式の舎利容器は密観宝珠形（みつかんほうじゅがた）といわれ、密教の観相（かんそう）に用いられたと考えられている。

厨子の向かって右の扉には内側に不動明王坐像を、左の扉には愛染明王坐像を描く。線描は緻密で、彩色の上に細やかな金泥線（きんでいせん）で毛筋や文様を表す。不動明王像が左手に三弁宝珠をとり、愛染明王像も通常は持物をとらない左第３手で宝珠をとる点は珍しく、宝珠法を修するために持物を変えたとみられる。県内には舎利厨子の遺品が多いが、本品は般若寺所蔵の厨子入舎利塔（重文）に次いで古いと考えられ、中世南都における舎利信仰の隆盛を示す優品として貴重である。

4　木奥家大工関係資料　297点　［有形文化財（歴史資料）］

［所在地］　奈良市芝新屋町17

［所有者］　木奥良彦

［時　代］　江戸時代～明治時代

［概　要］

江戸時代に春日座大工の一員として、春日社等の造営に携わった木奥家に伝わる資料である。本資料は、江戸時代後期のものを中心に、大工道具類、図面類、古文書・古記録類を合わせて297点から成る。

大工道具類は、斧・鋸・鑿・槌・錐・鉋など、江戸時代における大工道具の標準編成の大半を網羅している。中には口引き・メハジケといった、江戸時代に遡る伝世品がはじめて確認されたものも含まれており、種類の豊富さ、点数の多さは、国内の同種の資料群と比べても際立っている。図面類は、水谷社など春日社の摂末社の立面図や平面図があり、木奥家がこれらの造替に携わっていたことがうかがわれる。古文書・古記録類には、造替の規範とされた「春日社丈尺之記」の写本を含む造替仕様帳が複数残存し、中には、同じく十六人大工を務めた嶋野家から伝来したものが見受けられ、大工集団における知識・技術の継承という観点からも、重要性が認められる。

本資料は、多彩な大工道具に加えて、図面類、古文書・古記録類が一括して伝来しており、春日座大工の具体的な職能を多面的に伝えるものとして貴重である。

（上）図面類、古文書・古記録類

（左）大工道具類

５　尼寺廃寺塔跡心礎出土品（にんじはいじとうあとしんそしゅつどひん）　20 点　［有形文化財（考古資料）］

（耳環１２点、刀子１点、水晶玉４点、ガラス玉３点）

［所在地］　香芝市藤山一丁目 17 番 17 号（香芝市二上山博物館）

［所有者］　香芝市教育委員会

［出土地］　香芝市尼寺二丁目 76 番

［時　代］　飛鳥時代

［概　要］

尼寺廃寺は香芝市尼寺に位置する。平成３年（1991）から 12 年（2000）に発掘調査がおこなわれ、平成 14 年（2002）に国史跡に指定された。塔跡心礎出土品は平成７年（1995）の調査で出土した。

伽藍配置は東を正面とする法隆寺式伽藍配置で、金堂が北、塔が南に並び、周囲に回廊が廻る。塔の造営は坂田寺式軒丸瓦の出土から、670 年頃と想定される。

塔跡基壇は検出状況で東西約 9.3m、南北約 11.5mを測り、復元基壇高は約 1.4mと推定できる。心礎石材の規模は長さ・幅ともに 3.8mと巨大で、心礎上面には心柱と周囲に４本の添柱を設置するための彫り込みがある。心礎は地下式で、検出された基壇上面から深さ 1.0mを測る。

心礎からは、耳環 12 点、刀子１点、水晶玉４点、ガラス玉３点が出土した。耳環は大きく２種類に分類することができる。金板を丸めたのちに折り曲げて作成されたものが３点、銅芯金板貼りのものが９点である。刀子は幅１㎜の連続打刻文が施された銀製鞘口金具が装着されている。水晶玉は丸玉と切子玉が各２点である。ガラス玉は丸玉、トンボ玉、小玉が各１点である。丸玉は表面が薄く剝離した状態であることから、本来の色調は不明である。トンボ玉は淡黄色を主として、青色が２箇所で混じる。小玉は青色を呈する。

これらは心礎上面の複数箇所に分かれて出土しているが、中央部で最も集中している。舎利荘厳具あるいは供養具としての意義をもつ。

心礎から出土した耳環・玉類・刀子は古墳の副葬品と共通するもので、飛鳥寺や中宮寺などの塔心礎出土品に類例がある。古墳の副葬品と共通する装身具などが心礎に納められた例として重要であり、さらに発掘調査によって出土状態がわかる事例としても貴重な考古資料である。

尼寺廃寺塔跡心礎出土品

６　大保の宮座行事　［無形民俗文化財］

［所 在 地］　奈良市大保町

［保持団体］　大保八坂神社宮座行事保存会

［概　　要］

奈良市大保町の八坂神社では氏子の中の最高齢者が老主、次が副老主となる。また老主・副老主に次ぐ高齢者は十人衆となり、当屋主は籤で選ばれる。秋祭りでは家並み順で選ばれるお渡り衆が渡御で楽器を持ち、神社で三角跳びと横跳びを奉納する。

秋祭りの宵宮祭では、老主を先頭に当屋主とその子息、お渡り衆が神社のある丘の周囲を一周する。青の素襖を身につけ、扇を持ち、立烏帽子をかぶったお渡り衆は年齢順に太鼓・小鼓・法螺貝・篠笛・編木の楽器を担当し、鳴らしながら道中を進む。拝殿に戻ると神事があり、お渡り衆によって拝殿内で三角跳びが行われる。最初に楽器と扇を前において拝んだ後、扇を広げて床を払う仕草をする。つぎに楽器と扇を中央におく。楽器を中心に、正三角形の形をなすように跳ぶ。楽器より本殿側を起点に、時計回りに一周する。これを一人が三周繰り返す。三周目にもとの位置に戻ると、逆の方に少し跳ぶ。最後に楽器を短く鳴らし、もとの席に戻る。

翌日の氏神祭では十人衆が加わって朝から神事がある。宵宮と同じ一行は拝殿から境内の周囲を三周する。一周目の途中、鳥居脇で立ち止まり、老主の主導で全員が唱和して、大保の山中にある二十一ヵ所の森神の呼び出しをする。拝殿に戻ると、お渡り衆は境内に出て、編木役の最年少の二人が横跳びをする。両手を水平に広げ、向かいあって三度、背中あわせで三度、また向かいあって三度、真横の方向に跳ぶ。

楽器を手にしたお渡り衆による三角跳びや横跳びは田楽芸を模倣した東山中の秋祭りに共通した芸能の代表的なものである。また森神の呼び出しは他の地域では見られない貴重な儀礼である。楽人衆の渡御と田楽芸を伴った東山中における祭祀形態を典型的に伝承するとともに、二十一の森神を呼び出す特殊な儀礼を含む宮座行事として重要である。

7　史跡　西安寺跡（さいあんじあと）［史跡］

［所在地］　北葛城郡王寺町舟戸二丁目 4189 番

［所有者］　舟戸神社

［時　代］　飛鳥時代

［概　要］

西安寺は大和川左岸に位置する飛鳥時代創建の寺院である。『続日本後紀』天長 10 年（833）閏７月癸未条には「在大和国広湍郡西安寺、俗号九度」と記載されている。また、西安寺跡が想定されている舟戸神社境内は大字王寺小字「西安寺」に位置している。

塔跡は、塔心礎・四天柱礎石が抜き取られていたものの、側柱礎石、礎石抜取穴、乱石積み基壇が検出された。基壇外装は乱石積みで、花崗岩を中心とした石材で４段分が確認された。乱石積み下段部には細弁十六弁軒丸瓦が挟まっており、乱石積み裏込めに凝灰岩片が混入していた。このことから、乱石積み基壇は改修されたものであり、当初は凝灰岩切石積み基壇であった可能性もある。出土した瓦には素弁の軒丸瓦も含まれるが少なく、出土量が最も多い７世紀後半の細弁十六弁軒丸瓦と三重弧文軒平瓦の組み合わせが塔創建期に使用された瓦と考えられる。

塔跡の北側では、礎石と礎石抜取穴、版築層や基壇東端に伴う石列が確認された。これが金堂跡の可能性が高い。このことから、四天王寺（山田寺）式伽藍配置であると想定される。

舟戸神社の北西でおこなった調査では、南北溝が確認されている。これは築地の雨落ち溝とみられ、発掘調査で確認された塔跡などと主軸が同じである。この溝が寺域の西端である可能性が高い。この他、舟戸神社周辺には、発掘調査で確認された主軸に平行する地割りが東側に、直交する地割りが北側と南側に残っており、これらが寺域を示していると考えられる。

大和川左岸域では西安寺跡をはじめ、飛鳥時代の寺院が集中して創建される。西安寺跡はその中でも大和川に最も近く、その玄関口といえる場所に建立されたものである。また、基壇上面が削平を受けておらず良好に残存すること、塔跡基壇が法隆寺西院伽藍五重塔と同規模であることなど、大和川左岸域における飛鳥時代創建の古代寺院として重要な位置にあるといえる。

右上　塔跡全景写真（北東から）

左　西安寺跡寺域推定範囲（点線）と指定範囲（赤実線）

追加指定１　史跡 越塚古墳（こしづかこふん）［史跡］

［所在地］　桜井市粟原 2896 番、2904 番、2905 番、2906 番、2908 番、2909 番、2911 番

［所有者］　内藤よし子

［時　代］　古墳時代

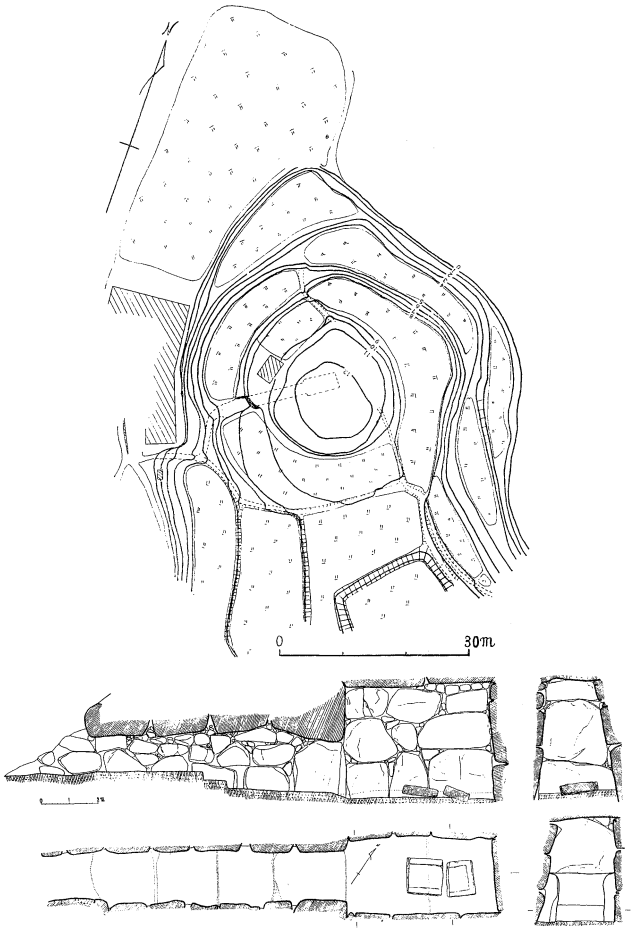
［概　要］

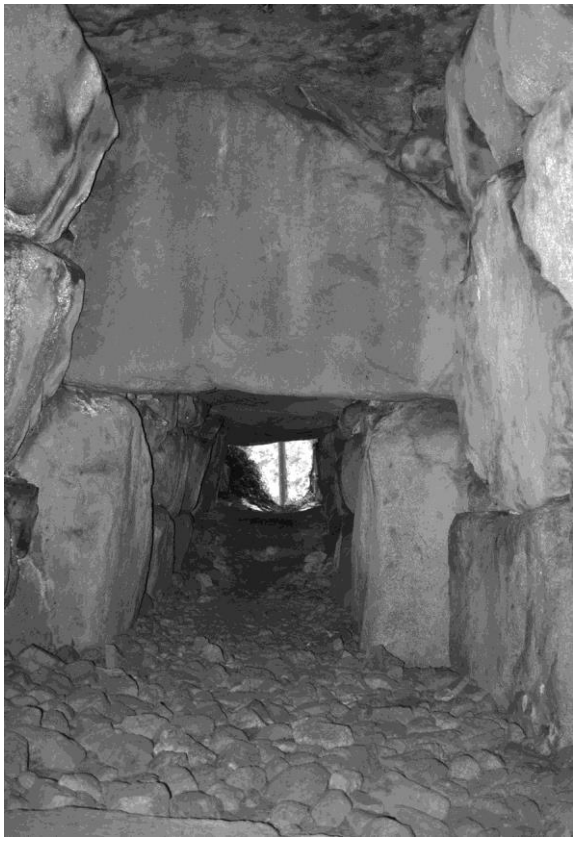
越塚古墳は、桜井市南東部の粟原川流域に所在する古墳で、国史跡天王山古墳の約 730m東方に位置する。昭和 33 年（1958）に墳丘測量ならびに横穴式石室の実測調査が実施された。古墳時代後期の代表的な石室のひとつであり、昭和 34 年（1959）に県史跡に指定された。

墳丘は直径 43.5m、高さ７ｍの円墳である。石室は全長 11mの規模で、玄室長 5.2m、同高さ４ｍ、奥壁部の幅 2.6mの両袖式である。袖石には巨石による一枚石を用いている。玄室は天井が高く、奥壁、側壁ともに３段積みである。これらの特徴は、天王山古墳の石室構造に類似する。玄室の中央部には、大型の組合せ式石棺の底石２枚が残されている。奈良盆地でも有数の巨石古墳で、桜井市域では墳丘、石室ともに天王山古墳に次ぐ規模である。石室の特徴から、６世紀後葉の築造と推定される。

現在の指定地番である粟原 2896 番は古墳の東側にあたり、史跡として保護すべき墳丘の主要部を含んでいない。このことは、地籍調査を経て判明した。

追加指定するのは、石室を含む墳丘と、その築造に関わる周辺部である。これらを指定することで、史跡としての保護を確実なものとすることが適切である。





県指定文化財の指定状況

種類 ＼ 指定年度		近年の年度別の指定状況（※右欄は指定解除）										30年度合計（※30年度新指定分含む）
		H26		H27		H28		H29		H30の新指定		
有形文化財	建造物（棟数）	1（2）	▲1（▲6）	1（3）	▲1（▲2）	1（1）		1（1）				118（191）
	絵画	1		1		1		1	▲1	1	▲1	43
	彫刻	1	▲2	1		1		1		1		104
	工芸品	1		1		1		1		1		51
	書跡･典籍							1				14
	古文書	1			▲1	1						14
	考古資料	1		1		1		1		1		18
	歴史資料			1						1		9
	小計	6		6		6		6		5		371
史跡			▲2			2				1		54
名勝												4
天然記念物												60
有形民俗文化財		1				1						23
無形民俗文化財				2				1		1		41
無形文化財												3
選定保存技術												1
合計		7	▲5	8	▲2	9		7	▲1	7	▲1	557

※▲は、国指定に伴う県指定解除

26年度　建造物「長谷寺大講堂、護摩堂及び本坊」、彫刻の西方寺「木造薬師如来立像」及び金峯山寺「木造仁王立像」、史跡「下池山古墳」及び「中山大塚古墳」

27年度　建造物「日本聖公会奈良基督教会」、古文書「染田天神講文書」（国歴史資料に指定）

29年度　絵画「絹本著色阿弥陀聖衆来迎図」（奈良国立博物館へ売却）

30年度　絵画「絹本著色聖徳太子絵伝」（奈良国立博物館へ売却）